

『月詣和歌集』における「落葉」題歌群について

三 澤 小百合

はじめに

『月詣和歌集』十二巻は、賀茂重保（一一一九～一二九二）が撰び、寿永元年（一一八二）十一月に成立した私撰集である。部立は、「巻第一 正月附賀」「巻第二 二月附別部」「巻第三 三月附羈旅」……「巻第十二 十二月附釈教」というように、各巻の前半に月別の四季歌、後半に人事歌を置き、特徴的である。仮名序・真名跋を持ち、撰集作業には祐盛法師（一一一八～没年未詳。一二〇〇年十月以降まもなく没するか¹）の助力があった。現存伝本には完本がなく、巻第八と巻第十一後半に大きな欠脱があるものの、現段階で最良の研究テキストは杉山重行氏による校本および新編国歌大観本であるといえよう。従来の研究は、主に諸本・撰者・歌人構成・撰集資料（寿永百首家集を含む⁵）といった基礎的段階にとどまっている。これらについては今後も継続して課題と

しなければならぬところであるが、これまで深く追究されることの少なかった内容研究も併行して進める必要があると思われる。

さて、平安時代末期から新古今時代にかけてのさかんな歌壇状況のなかで展開し、細分化したり、特定の季節の歌題として固定化したりする歌題がいくつもある。それらのうち「霞」題に注目して、『月詣和歌集』（以下、『月詣集』と略称）の配列構成の特徴を考察したものに杉山氏のご論²があり、そこで次のように指摘されている。

また、この「霞」以外の歌題でも、六月の「夏草」、十月の「落葉」などは後の六百番歌合に、二月の「帰雁」、十月の「雪」、十一月の「千鳥」などは千載集や新古今集によって次第に成長して行く姿が認められる歌題であり注目される。このように、本集には新しく、そして次第に成長して行く歌題が認められる——一つの当代的な

風潮の反映として考えることもできるが——という事実は、千載集や新古今集などの後続作品との関係を考慮した上で、さらに解明、評価されて行かねばならない問題ではないかと思う。

こうしたご指摘にならない、本稿では、巻第十の「落葉」題歌群について考えてみたいと思う。まず、万葉集時代から八代集時代にかけての「落葉」題の展開における『月詣集』の位置づけを検討し、ついで、巻第九・巻第十両巻にある、和歌の素材として落葉をとりあげた四季歌を見、巻第十の「落葉」題歌群の特徴を考察する。そうすることにより、『月詣集』巻第十の「落葉」題歌群のありようを明らかにしてみたいと思う。

一 「落葉」題の展開と『月詣和歌集』

「落葉」題は「紅葉」題から分化して成立した歌題である。本節では、まず、「落葉」が歌題として成立し、さらにそれが冬の歌題として定着するまでの過程を概観する。

『歌ことば歌枕大辞典』の「落葉」の項(堀川貴司氏担当)を参考に、「落葉」が歌題として成立してきた過程をまとめると以下のようになる。

- ①「紅葉」の一様相として落葉そのものを詠んだ歌は『万葉集』や三代集秋冬両部にあるが、歌題としては見られない。

②「落葉」が歌題として意識され始めたのは、「紅葉」と「落葉」とが並んで『和漢朗詠集』の秋の項目に用いられてからであろう。

③平安中期、「落葉」は漢詩題としては一般的な用語であったこともあり、歌題としての「落葉」成立初期の段階から、漢詩句の趣向が結題の成立や作歌に影響を与えている。

④歌題としての「落葉」が勅撰集に登場したのは『後拾遺集』以降であり、院政期初頭には歌題として定着したのであろう。

「落葉」題の成立当初は、秋の歌題なのか冬の歌題なのか確かでなく、また晩秋から初冬にかけての景物であるために歌集の中では秋冬両部に「落葉」題歌が配されている。

「落葉」題が冬部のみ(9)に収められたのは、勅撰集では『新古今集』以降である。それまでどのような様子であったかを見ると、次の表のようになる。

【表一】

作品名	勅撰集	私撰集	百首歌・歌合
後拾遺集	△		
永久百首			●
金葉集	△		
為忠家初度百首			●

理すると次のようになる。⁽¹¹⁾ なお、() 内の数字は歌数を示す。

十月一日(二)、初冬(四)、時雨(十一)、落葉(十七)
霜(六)、霰(六)、雪(二十一)、冬月(四)

これを見るかぎり、十月の部の中で歌数が多いのは、時雨、落葉、雪であり、時雨と落葉は十月の部前半の大部分を、雪は十月の部後半の大部分をそれぞれ占めている。つまり、落葉は、時雨とほぼ対等に並んで十月の部前半を構成しているということである。そのうえ、時雨と落葉とは晩秋から初冬にかけての過渡期的素材であるという共通性を持ち、相互の影響等も考えられるので、「時雨」の詠まれ方を参考にしながら「落葉」について考えていくことにする。

それでは次に、「時雨」と「落葉」の各歌群の、歌題の内容を見る。歌題の後の() 内の数字は歌番号と歌数を示す。

【表二】

時雨(八九二〜八九六)(五首)	一語題
野徑時雨(八九七)	時雨遠近(八九八)
暁時雨(八九九)	月前時雨(九〇〇)
山家冬(九〇一・九〇二) ↓ 歌材としては時雨	結題
落葉(九〇三〜九一一)(九首)	一語題
落葉埋橋(九一二)	海上落葉(九一三)
落葉水にうかぶ(九一四)	雨中落葉(九一五)
	結題

故郷落葉(九一六・九一七) 古砌落葉(九一八)
閑庭落葉(九一九)

一見してわかるとおり、各題においては、一景物一概念の歌題(以下、「一語題」と呼ぶ。例えば「時雨」)が先、二つ以上の景物・概念を結びつけた歌題(「結題」。例えば「野徑時雨」)が後にそれぞれまとめられるという配列になっている。すべての歌題がこのような配列になっているわけではないが、『月詣集』の四季歌全体をとおしてこの傾向が強い。

三 「時雨」と「落葉」それぞれの詠まれ方

『月詣集』において「時雨」「落葉」をそれぞれ歌題とする四季歌は「巻第十 十月」のみに収められているが、和歌の素材として時雨や落葉を詠んだ四季歌は「巻第九 九月」にも収められている。このことから、『月詣集』は、時雨と落葉を歌題としては冬のものと扱い、歌材として、あるいは自然現象としては晩秋から初冬のものとして扱っていることが考えられる。時雨や落葉を含んだ歌を秋冬両部に配することは先行の勅撰集・私撰集の伝統でもある。しかし、九月部に収められたそれらと、十月部に収められたそれらとは微妙な相違点を持っていると思われるので、ここでは各部における時雨と落葉の詠まれ方を検討する。なお、ここでは、今まさに散りゆく紅葉からすでに散り落ちた後の紅葉や、紅葉の散りざ

まなどを含む概念として「落葉」をとらえることにする。

まず、時雨について検討していく。

『歌枕歌ことば辞典』⁽¹²⁾によれば、時雨とは「晩秋から初冬にかけて降るにわか雨」のことであり、時雨が九月と十月（つまり晩秋と初冬）のものになっていった万葉集時代では「木の葉を色づかせるもの」としてとらえられ、時雨を十月すなわち初冬の雨と見るようになった平安時代では「木の葉を散らすもの」というとらえ方が多くなったという。

『月詣集』九月の部で詠まれている時雨は、主に「紅葉」題歌の中にあり、「木の葉を色づかせるもの」との前提に立っている場合が多い（七五八・七六〇・七六一・七六五・七六六番歌）。例えば、

日をへつつしぐるるままに立田山まつのみひとり残りゆ
くかな
(七六一／俊恵法師)

は、立田山の木々は時雨の降るたびごとに色を変えていく、けれども松だけはいままで緑のままを取り残されてゆくよ
うだ、と詠い、詠者の視点は松に向けられているのだが、時
雨は「木の葉を色づかせるもの」であるとの前提の上で詠ま
れている和歌である。また、

長月の時雨のあめはもみぢ葉をそめての後にあらふなり
けり
(七六六／覚盛法師)

のように、「木の葉を色づかせるもの」であると同時に「木

の葉を洗い去る（散らす）もの」でもあると理知的な詠まれ
方もされている。

一方、十月の部の「時雨」題においては、時雨の降る時の
予測しがたさや時雨が頻繁にくり返し降ることを詠んだ歌
(八九二・八九四・八九五・八九八・九〇〇・九〇二番歌)
が目立つ一方、時雨を「木の葉を色づかせるもの」または
「木の葉を散らすもの」とする詠み方はほとんど見られない。

次に、落葉についてはどうであろうか。

「巻第九 九月」の部では、「紅葉」の一樣相として詠まれ
ているのだが、数は少なくわずか二首である。

色みえぬ秋をしらする紅葉のちるは暮れぬるここちこそ
すれ
(七六七／右大臣)

音羽山ぬさとちりかふ紅葉をせきもる神やわが物とみる
(七六八／大納言実国)

七六七番歌では落葉によって暮れゆく秋を感じるという発
想であり、七六八番歌では散り交う紅葉を幣と見立てている。
どちらも紅葉の散り始めた頃を詠んでいるといえよう。七六
七番歌の「色みえぬ秋をしらする紅葉」という表現や、七六
八番歌で、同様の発想の場合は「立田山」などが詠まれるこ
とが多かったのに対して、「音羽山」を出し逢坂の関の神へ
の手向けとするのは新しい感じがするが、発想自体は三代集
以来の伝統的なものである。

それに対して、十月の部の「落葉」題歌群では、この時代⁽¹³⁾の特徴を映すような発想による詠み方がなされていると思われる。まず、落葉と時雨とを同時によみこんだ歌(九〇四・九〇七・九〇八・九〇九・九一一・九一五・九一七番歌)が目立つ。そして、ここでも時雨は、「木の葉を色づかせるもの」や「木の葉を散らすもの」としては機能していない。

『歌枕歌ことば辞典』に指摘される(『千載集』『新古今集』の時代になると)夜の時雨の歌が急に多くなり、…(中略)…「音」によって時雨を知るというケースが多くなってきた⁽¹⁴⁾というように、落葉と時雨との詠み方も変化してきている。

それまでは時雨が因、紅葉や落葉が果となり、葉が色づいたり散ったりするという詠み方が多かったが、ここでは落葉(木の葉の散るさま)と時雨の降るさまとを対照的にとらえる詠み方が多くなってきている。すなわち、時雨と落葉とは、因果関係をとることなく、両者の類似点や相違点の指摘が和歌の表現のあり方のひとつとなっている。そして、その場合の類似点としては、時雨も木の葉も晩秋から初冬に「降るもの」である点、板屋などで聞くと「音が似ている」点が前提としてある。

例えば、

よもすがらたえず音する木のはこそ山めぐりせぬ時雨な

りけれ

(九〇四／藤原定長)

では、落葉と時雨が右に述べたような類似点によって結びつ

けられながらも、落葉はひとところ終夜たえず音がして山めぐりしないもの、時雨は降り出したらひとところに停滞せず山めぐりするもの、というような相違点のあるものとして詠まれている。同歌は、『寂蓮法師集』には「終夜たえず音する木の葉かな山めぐりする時雨ならねど」(四一)とある。「山めぐりする」という詞は、『寂蓮法師集』のように、もともと時雨の方に使うのが一般的であるが、——どちらが原歌で、どちらが異文歌であるのかの問題は残るもの——それを裏返して、落葉を「山めぐりせぬ時雨」と表現したところに九〇四番歌の新しさがある。

さらに、次のような歌がある。

散りかかる谷の小川の色づくは木のはや水のしぐれなる

らむ

(九〇七／右大臣)

ここでは、散り落ちることによって水の色を染めた紅葉を「水のしぐれ」と表現しており、これも新しい表現である。

『清輔集』に「葉落水紅」題で「ふるからに谷の小河のみづるはこのはや水の時雨なるらむ」(一九五)とあるのと非常に似ている。時雨が木の葉の色を変え、木の葉が散って小川の水の色を変えている。だから木の葉は色を変えるところで水にとっての時雨なのだろう、というわけである。つまり、「木の葉を色づける時雨」「谷の小川の水を色づける木の葉」といった連想による新たな発見がある。また、この歌は、

治承二年六月十日の「右大臣兼実家百首」の「紅葉」題の歌

であり、『千載集』にも入集しているが秋下の中にある（三七九）。同じ時の百首歌の「紅葉」題の歌は『月詣集』には全部で四首（七五九・七六〇・七六七・九〇七）あるが、前の三首は九月の部にあり、この九〇七番歌のみ十月の部の「落葉」歌群の中に配されている。このことを撰者の配列意図という視点から見ると、九〇七番歌はもともとの歌題に合わせて九月に入れるよりも、内容の面で落葉と時雨とを対照してとらえているので、十月に入れたのだと考えられる。

右に挙げた歌のほかにも、『月詣集』巻第十の「時雨」題歌群の一部と「落葉」題歌群の中には時雨と落葉とを対照的に用いている歌が多い。九〇四・九〇七番歌のように現象的な類似性から「山めぐりせぬ時雨」「水のしぐれ」という新たな発見の感じられる表現をとったものはごく一部であり、これらは新しい詠み方の模索の結晶と考えられようが、時代のなかでは傍流的である。この時代に多く用いられたのは、落葉と時雨との聴覚的類似性をめぐる詠み方である。このことに関しては、次節でさらに考察する。

四 落葉と時雨の聴覚的類似性

時雨の降る音と木の葉の散る音とが似ていることを発想の起点とした歌は、『後撰集』の「秋の夜に雨ときこえて降りつるは風に乱るる紅葉なりけり」（四〇七／読人しらず）以来先例があり、『月詣集』の時代において特に新しいものと

いうわけではないが、当時の歌人たちが興味を持って様々な詠み方を試みた発想のひとつであると思われる。それは、『後拾遺集』に「落葉如雨」という題で、

このはちるやどはききわくことぞなきしぐれするよもしぐれせぬよも
（三八二／源頼実）

とある歌が、『袋草紙』『今鏡』『無名抄』などに出てくる、住吉社で「秀歌一首詠ましまして命を召すべき」と祈請して詠んだという伝説の一首であり、歌人たちの注目を集めていたことが想定されるからである。後藤祥子氏は、先に引いた『後撰集』四〇七番歌が「古今風の見立てそのものを身上とし」ており「自然の詐術に一瞬興じる古今調和歌の発想」であるのに対し、頼実歌は「落葉と時雨を聞き紛う山荘の静寂さや、それに耳を傾ける詩境、さらにそうした夜が幾夜も続いていく状況、いわば凄まじいほどに孤独な草庵住まいを選びとった人生観とドラマをも秘める」と述べられている¹⁶⁾。たしかにこの頼実歌はふつうの見立てを超えており、この歌以降は他の歌人も山中の板屋等の閑寂さや（主として夜の）孤独な詩情を意識した詠み方へと変化している。

さらに、次の二首もまた『月詣集』の時代の歌人たちに影響を与えていると考えてよいだろう。

音にさへ袂をぬらす時雨かな槇の板屋のよはの寢覚に
（「元永元年十月二日内大臣忠通歌合」・「時雨」題／源

定信）

まばらなるまきの板屋に音はしてもらぬしぐれは木の葉
なりけり（「久安百首」・「落葉」題／藤原頭広（俊成））

「音にさへ…」歌では「槇の板屋」という語が当時としては新しく、次の頭広歌へ受容されることとなり、さらには『後葉集』『続詞花集』『千載集』等に入集していることから頭広以外の歌人にも影響を与えていると考えられる。

「まばらなる…」歌は、まさに時雨と落葉の聴覚的類似性に着目している歌であり、この歌以降同種の発想の歌に「まきの板屋」あるいは「まきの屋」という語を用いることが急激に増える。例えば、「安元元年十月十日右大臣兼実歌合」の「落葉」題には、

時雨する音はすれども槇の屋のもらぬはおつる木の葉なりけり
（藤原尹明）

槇の屋にたえず音なふ木の葉こそ時雨れぬ夜のしぐれなりけれ
（九条兼実）

などとある（傍線部筆者。以下同じ）。加えて『月詣集』から例を挙げると次のとおりである。

まきの屋にをりをりちりしならのはのつももらぬけさぞ時雨とはしる
（八九六・「時雨」題／藤原宗隆）

ひとむらの時雨はすぎぬまきの屋にをりをりふるや木のはなるらん
（九一一・「落葉」題／藤原隆親）

右の四首には、粗末な板屋の中心にいて時雨とも散る木の葉とも聞き違えそうな音を聞いている、という共通の世界があ

る。心情を吐露するような直接表現がなくとも、閑寂さ、孤独感がそこはかとなく伝わってくるのは、「まきの屋」の語を用いた効果であろう。というのも、「まきの屋（板屋）」自体は四季の区別なく存在するものであるのに、この語を用いるのは、晩秋から冬の夜の歌が圧倒的に多く、時雨や木の葉や霰といった自然物の立てる音が引き金となって物思いする、という詩境——まさに「音にさへ…」の定信歌に代表されるような詩境が伝統的に受け継がれているからである。

また、『月詣集』から引いた二首を見比べると、表現上よく似た点が多い。まず、用語の面では「まきの屋」「をりをり」が共通している。文法上では第四句に係助詞が使われている歌の結びが連体形になっており、終止形で終わるよりも余情がある。内容の面では違いがあり、八九六番歌は、まきの屋の中にいる時は日常的に時折散っていた木の葉の音だと思っていたけれど、朝になって葉が積もっていなかったので「時雨」であったと知ったというものであり、九一一番歌は、ひとむらの時雨が通り過ぎた後にまた音がしているのは「木の葉」なのであろう、というものである。これは歌題が八九六番歌は「時雨」、九一一番歌は「落葉」であるという違いがあるからである。けれども用語や文法上の共通点は見過ごせず、両歌を撰んで入集させた撰者の意識にも二首を一对で見た時のおもしろさがあったのではないか。実際、八九六番歌は「時雨」の一語題歌群の一番最後（次の歌から結題歌群に

移る直前の位置。【表二】で確認できる）、九一一番歌は「落葉」の一語題歌群の一番最後にそれぞれ置かれており、撰者がこれらの二首を一对として見ていたと確定してもよいのではないか。

またさらには、『月詣集』の十月の部の、特に「落葉」題歌群において、時雨と落葉の聴覚的類似性に着目した発想の歌が『月詣集』の「落葉」歌の特徴を表していると考えられる。数値にしてみると他の歌集との違いが明らかになる。

【表三】

歌集名	「落葉」題歌数(A)	聴覚的類似性に着目した歌数(B)	Aに占めるBの割合(%)
後拾遺集	四	二	五〇・〇
月詣集	一七	五	二九・四
千載集	一三	一	七・七
新古今集	一〇	一	一〇・〇

【表一】に挙げた作品の中から、Bの「聴覚的類似性に着目した歌」の見られる勅撰集・私撰集のみを【表三】に記す。また、A・Bとして数えた和歌は、一語題・結題問わず「落葉」題と明らかな詞書のあるものに限った。特に、Bと認める際は、「時雨・落葉両者を形象させる表現のあること」「屋内において、時雨の音や落葉の音への聴覚が働いていること」の二つを満たしていることを基準とした。¹⁹⁾

『後拾遺集』は「落葉」題の歌数自体少ないので他の三集と直接比較することは難しいが、『月詣集』『千載集』『新古今集』

今集』の三集は対等に比較してもよいだろう。そうすると、『月詣集』の「落葉」題歌群には時雨と落葉の聴覚的類似性に着目した歌が相対的に多くあり、特徴的であるといえよう。そして、八九六番歌と九一一番歌を一对と考え配列したと想定されることとあわせて考えることにより、「時雨」と「落葉」とを対照的にとらえて十月の部前半を形成しようとした撰者の意識が推測されるのである。

おわりに

『月詣集』の「落葉」題歌群には、「落葉」が初冬の歌題と意識されて十月の部に収められており、私撰集・勅撰集のなかでは先駆的であること、時雨と落葉とを対照的に扱い、それらの聴覚的類似性に着目した和歌が目立つことなど、注目すべき特徴が見られる。ただし、「落葉」題として十月部にありながら、九月部に配するのが適当かとも思われる歌（例えば、九一〇・九一四番歌）などがあり、『千載集』に見られる俊成の撰歌・配列意識と比較すると、個々の和歌の配列順序における季節の推移への配慮など、繊細さに欠けるといふ面もある。

けれども、『月詣集』は十二世紀中期の歌人たちの和歌活動の世界を鮮明に映している歌集であるように思われる。これは、『月詣集』成立当時活躍中の歌人がほとんどを占めること、したがって撰集資料も寿永百首家集や撰者重保の主催

した歌会・歌合や「右大臣兼実家百首」など時代的に新しいものが中心になっていることなどからいえよう。そしてそれは、数年後に成立する『千載集』よりも顕著な場合があり、「落葉」題歌もその一例だと考えられる。

今後は、さらに他の歌題についても検討し、『月詣集』に見られる撰者の意識などを考えていきたい。

注

※和歌の引用と歌番号はすべて新編国歌大観本による。

(1) 祐盛法師の年譜については、杉崎重遠氏『王朝歌人伝の研究』(新典社、一九八六・三)参照。

(2) 杉山重行氏『月詣和歌集の校本とその基礎的研究』(新典社、一九八七・三)※以下、杉山氏単行本と呼ぶ)所収。新編国歌大観本も杉山氏の担当。本文の引用は、新編国歌大観本によるが、適宜校本を参照した。

(3) 撰者賀茂重保については、右に挙げた杉山氏単行本、多賀宗準氏「月詣和歌集について」(『大正大学研究紀要』第六十一輯(創立五〇周年記念論文集)、一九七五・一一)、川上新一郎氏「賀茂社家の歌人たち」(『和歌文学研究』第四十二号、一九八〇・四)、保坂都氏「賀茂家の歌人群」(武蔵野書院、一九九三・一二)など参照。

(4) 歌人構成については、谷山茂氏『千載和歌集とその周辺』(谷山茂著作集三/角川書店、一九八二・一)、杉山氏単行本など参照。

(5) 撰集資料の全体像は杉山氏単行本に述べられている。さらに寿永百首家集については、松野陽一氏『烏帯——千載集時代和歌の研究』(風間書房、一九九五・一一)所収「寿永百首

について」、森本元子氏『私家集の研究』(明治書院、一九六六・一一)、杉山重行氏「月詣和歌集の考察——歌人構成・入集資料を中心として——」(『和歌文学研究』第二十四号、一九六九・九)、井上宗雄氏『平安後期歌人伝の研究(増補版)』(笠間書院、一九八八・一〇)など参照。

(6) その他、松野陽一ゼミナール「平安末期私撰歌集の研究(一)——後葉・今撰・続詞花・月詣の配列と構成——」(『文芸論叢』第三号、一九六七・二)、大取一馬氏「月詣和歌集に関する二・三の問題 附祐盛法師歌集稿」(『高野山大学国語国文』第八号、一九八二・三)など参照。

(7) 杉山重行氏「月詣和歌集の考察——歌人構成・入集資料を中心として——」(『和歌文学研究』第二十四号、一九六九・九)

(8) 久保田淳氏・馬場あき子氏編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九・五)

(9) 有吉保氏『新古今和歌集の研究——基盤と構成』(三省堂、一九六八・四)参照。有吉氏のご論には「私撰集に於いても新古今集以前に成立したものは冬部だけに集められてはいない。」(二二六頁)とあるが、私見では、私撰集・勅撰集において「落葉」を冬部のみに収めたのは、『今撰集』『月詣集』『新古今集』の順だと考えたい。

(10) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成』(増補新訂)第四卷(同朋舎出版、一九九六・七)所収の「保延元年」[十月]播磨守家成歌合「仁安二年」[十二月]俊恵歌林苑歌合 雑載「嘉応元年夏」秋」前検非違使別当頼輔歌合」に「落葉」題が見られる。

(11) 松野陽一ゼミナール「平安末期私撰歌集の研究(一)——

後葉・今撰・統詞花・月詣の配列と構成——」（『文芸論叢』第三号、一九六七・二）所収の、私撰四集四季部歌題歌材一覧に倣う。

(12) 片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典』（角川書店、一九八三・一二）「時雨」の項参照。

(13) 「この時代」の範囲を特定しておきたい。

杉山氏単行本・研究編第三章「入集歌人時代別分布表」などにより、『詞花集』成立以降に活動が活発であった歌人たちが『月詣集』入集歌人の大部分を占めていることがわかる。なので、ここでは便宜上、久安初年から『月詣集』成立の寿永二年（一一四五年）～一一八二年あたりを「この時代」、『月詣集』の時代と考えておく。

(14) 前掲(12)に同じ。

(15) 藤岡忠美氏校注『袋草紙』（新日本古典文学大系／岩波書店、一九九五・一〇）より引用（原漢文）。

(16) 後藤祥子氏「後期撰関時代の歌壇」（『国文学』第二十六卷十二号、一九八一・九）

(17) 久保田淳氏『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、一九七八・一一復刊）参照。

(18) 当歌に関連して、柳澤良一氏『久安百首』における藤原俊成の漢詩文撰取歌について」（『国語と国文学』第六十三卷十号、一九八六・一〇）、渡部泰明氏「藤原俊成の『久安百首』（『国語と国文学』第六十五卷一号、一九八八・二）、宇佐美眞氏「千載集時雨歌の特色——「もる時雨」を手掛かりとして——」（『解釈』第三十八卷九号、一九九二・九）、檜垣孝氏『俊成久安百首評釈』（武蔵野書院、一九九九・一）など参照。

(19) 歌数カウントの際、個々の基準の相違により、数値の変動

があるが、おおまかな傾向はとらえられるものと考え、繁雑かとも思われるが、【表三】中に記した歌集について、A・Bとカウントした歌の歌番号を記しておく。

・『後拾遺集』（A三六二・三六三・三八二・三八三／B三八二・三八三）

・『月詣集』（A九〇三～九一九／B九〇四・九〇八・九一一・九一五・九一七）

・『千載集』（A三六一～三六六・三六九・三七三・三七四・三七六・三八〇・四〇四・四一八／B四〇四）

・『新古今集』（A五五六・五五七・五五九～五六五・五六七／B五六七）

(20) 杉山氏単行本参照。

〈付記〉本稿の論旨を、日本文学協会で中世部会の例会（平成十四年十月三十一日）にて口頭発表いたしました。席上ご教示賜りました方々に深く感謝申し上げます。